

令和三年度 滋賀県立草津東高等学校普通科 特色選抜 小論文 問題

【注意】

- ・ 問題用紙、解答用紙、下書き用紙の三枚とも受検番号を算用数字で記入しなさい。
- ・ 漢字は楷書、仮名遣いは現代仮名遣いで書きなさい。
- ・ 問の答えは、原稿用紙の正しい使い方に従って書きなさい。（名前は書かないこと。）

受検番号

次の文章は、大学の理学部や医学研究科で学んだ後、美術研究の世界に進んだ経歴を持つ筆者が記した文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（一部省略した箇所がある。）

サイエンスとアート。相反する点は、いくらでもあげられる。

たとえば、普遍性と偶然性。サイエンスの実験では、条件をそろえれば毎回同じ結果になることが求められる。データは平均化され、一回きりの出来事は「外れ値」として扱われる。しかしアートでは、偶然性がだいじにされ、平均値よりも「外れ値」にこそ光があてられるようなことが多い。

たとえば、「わたし」の存在。サイエンスの論文では、「思う」より「考えられる」という表現が好まれる。だれが考えてもそう解釈できる無理のない論理だという意味だ。つまりサイエンスは、できる限り「わたし」を排除する。いっぽうでアートは、むしろ「わたし」がなければじまらない。「わたし」がこう思う、「わたし」はこう感じる。ほかのだれもが気づかなかった「わたし」の「思う」や「感じる」を切り出して表現する。解釈も鑑賞者によつて異なり、そこに一つの正解があるわけではない。

もはや一八〇度違う部分も多いのだけれど、サイエンスとアートは対極に位置するわけではない。むしろ、その根っこにこそ共通するものがある。

その思いを強くしたきっかけが、芸大に入ったばかりのころ、特別講義でこられた内藤礼さん（現代美術）のお話だ。

「たとえばいま、木漏れ日からさす光がカーテンにきらきら映し出される感じ。そんなふだんの生活のなかの一場面や自然の美しさを、いいなあ、と感じている。ほんとうはそうして自分で感じていただけでいいのだけれど、その「感じ」をアートのなかに表現したい。別にだれがしなくてもいいのだけれど、やらずにはいられない。わたしは、究極に美しいものをつくりたい」

この言葉が、研究者として自分が目指す姿勢と重なり、サイエンスからアートの分野に足を踏み入れたときの迷いを吹き飛ばしてくれた。

大胆に一般化するならば、サイエンスは「！」を「？」に変えて、その答えを追究していくもの。いっぽうのアートは「！」をかたちや音に表現していくもの。そんなふうにシンプルに表せるのではないかと考えるようになった。

どんな分野に進むにしても、まずは「！」を感じるこころと「？」を探すこころを磨くことが肝心ではないか。

（齋藤亜矢『ルビンのツボ 芸術する体と心』による。）

（注）普遍性Ⅱすべての場合にあてはまる可能性。

外れ値Ⅱ得られたデータの大部分の傾向から大きく離れた値。

問 高校生活において、「！」を感じるこころを磨くためにはどうすればよいか、本文中に述べられている「！」とは何かを明らかにしながら、あなたの考えを二百四十字以上、三百字以内で述べなさい。